

はじめに

宮脇 千絵*

1. 刊行の経緯

本論集は、南山大学人類学研究所の共同研究「人類学・考古学における『大きな理論』と『現場の理論』」(2019～2021年度、代表：宮脇千絵)の成果論文集である。

本研究会のテーマは、人類学研究所が2019年度に設立70周年を迎えることに合わせ、後藤明・人類学研究所前所長、渡部森哉・人類学研究所所長、藤川美代子・人類学研究所第一種研究所員、高村美也子・人類学研究所研究員(いずれも2018年度当時の所属・職位)とともに定めた。設立70周年事業として「人類研の歩みと人類学の未来」(2019年12月7日)、「人類学と博物館——民族誌資料をどう研究するのか?」(2019年12月21日)と2回のシンポジウムを実施したが、本研究会の初年度はそこへ至るプロセスとして位置づけられた。

人類学研究所は、南山大学の前身である名古屋外国語学校が創立した1949年9月1日に「人類学民族学研究所」として設立された。その後1954年に人類学研究所と改称して現在に至る。神言会員でアントロポス研究所(現ドイツ)のヴィルヘルム・シュミット博士の系譜を継承すべく設立されたことから、ドイツ歴史民族学派・文化圏説の再検討をおこない、人類学研究所のアイデンティティを再構築することを目標として、2019年度に設立70周年事業が展開されたのである。

シュミット博士の活動の変遷を振り返りながら、上記メンバーのあいだで、学術的な潮流や理論とフィールドでの個人的な経験との関係性が話題となった。生身の身体をもってフィールドに入る人類学者や考古学者は、ホリスティックな学術的理論をいかに解釈し、

また再構築していくのだろうか、そこに世代差や地域差はあるのだろうか。そこで、地域を超えて共有される学術的潮流を「大きな理論」、フィールドの特性によって立ち上がってくるローカルな理論を「現場の理論」とし、その関係性がいかなるものなのか、および自身の研究がそこにいかに位置づけられるのかを探究することを共同研究会のテーマとした。

人類学者・考古学者はフィールドでの出来事を、民族誌としてまとめあげる過程で、理論的な考察をおこない学問への貢献を果たす。一方で、1990年代以降、いわゆるマリノフスキーを典型とするスタイルにとどまらない、多様なフィールドワークや記述方法の模索、理論構築の試みがおこなわれている。それゆえ、その学問的営みは、もはやホリスティックな理論に集約させることだけが目的ではなくなっている、もしくは各論の積み上げが主流となることによって誰しもが拠るメジャーな理論自体が不在となっているかのような状態にある。また、現地の研究者やインフォーマントとの協働がますます要請される現在において、その成果のとりまとめには、むしろ現地において構築された理論への理解が不可欠であろう。

3年間の共同研究を踏まえて本論集に収められた各論考では、「大きな理論」と各地において構築されてきた「現場の理論」がどのような関係にあるのかを検討する。それぞれの論考から、転換期を迎えている人類学・考古学的思考の再検討と、フィールドに立つ研究者ひとりひとりが眺める理論の定点観測を共有することも可能となるだろう。

2. 各論の概要

吉田竹也は、「観光を定義することの困難さ」を出

* 南山大学

発点とし「大きな理論」と「現場の理論」の関係性を整理する。「現場の事実」に基づく人類学では、「大きな理論」と「現場の理論」を峻別することは難しいこと、とりわけディシプリンが複数に交差する観光論では、「大きな理論」から「現場の理論」までを見出せることを明らかにする。そのうえで観光の定義について検討を重ねる。

菅沼文乃は、人口高齢化の課題とともに蓄積されてきた老いや老年者を対象とした人類学的研究を検討する。本論では従来の老い・老年者に関する研究を、人類学構造機能論的アプローチ、文化事象や社会的位置づけとしての展開、老いや老年者それ自体に接近する民族誌的研究に分類し、その絶え間ない模索について分析をおこなう。人類にとって普遍的な経験となる老いは、引き続き重要なテーマであり続けるだろう。

角南聡一郎は、民族学者・文化人類学者として知られる大林太良の物質文化研究に焦点を当て、神話研究との相互補完的な関係性を明らかにする。角南は、大林が物質文化を類型化し分布図を示すという手法を、神話・説話を類型化し分布図とすることに応用したのではないかと説く。マイナーな分野だとみなされることが多い神話と物質文化の研究は、決してその意義を失ってはいない。

後藤明の研究ノートは、日本古代史あるいは古代史に関係する大林太良の業績を、縄文時代、弥生時代（邪馬台国）そして古代王権交代論から詳細に概観する。そこから、大林の歴史民族学的な立場からの人類史を再構成するという「大きな理論」、そして地域や時代を越えて見られる人間行動の一定の規則性とその物質的な現れである「現場の理論」のあり方を明らかにする。

野澤暁子は、ジャワやバリに伝わる「*Sri Tanjung*」の物語が、インドネシアの文学者 Priyono によってオランダ語で出版されたことを取り上げる。そのテキスト化の実践からは、西洋の学問的パラダイムに自らの思想を適合させながら、ジャワ人としてのアイデンティティを發揮してオランダとインドネシアの両方で舞台芸術の普及に努めた Priyono の姿勢が読み取れる。学術的なテキストと土着の知識を織り交ぜながら、新しい解釈がインドネシアの文学／芸能の継承を活性化させたことを明らかにする。

渡部森哉は、南米のアンデス研究の事例から「大きな理論」と「現場の理論」の関係について論じる。アンデス研究では、地域を越えて応用されるような「大

きな理論」は形成されにくく、ローカルな理論や議論の仕方が強く認められるという。各時代の学術的流行の影響を受けながらも、3人の巨匠の弟子筋を中心に独自の展開をみせたアンデス研究の流れを詳述する。

中尾世治は、近年の人類学の理論的転回を研究蓄積の断絶ととらえ、そこに陥らない人類学における理論と研究の蓄積のあり方を問う。ナイジェリアのティヴの経済史に焦点を当て、民族誌的な記述がどのような点で批判され、あるいは再解釈されたのかを検討する。そして歴史観と概念という理論が新たなものになることで、民族誌的記述が変容したり拡張したりしていることを明らかにする。

高村美也子は、スワヒリ (Swahili) という用語をめぐる、歴史学や文化人類学における用法と、自身がタンザニアで感じた「スワヒリ」感について論じる。東アフリカで使用されるスワヒリの用法は従来多義的であったが、タンザニアでもあいまいさが増しているという。そのことを、タンザニアのボンディ社会におけるアイデンティティのあり方などから考察する。

張玉玲は、華僑華人をめぐる研究史を振り返り、そこには地政学的、文化的、政治的概念としての「中国」が絡んできたことを指摘する。しかし母国である中国との距離の取り方も多様になっている現状を鑑み、「中国」を冠する華僑華人研究が学問としていかに成り立つのかと問う。日本在住中国人である自身の「現場の理論」の探求は、華僑華人という枠組みを超えて人間を研究することの意義を改めて浮き彫りにする。

3. 研究会の記録（所属は当時のもの）

2019年度

第1回研究会 2019年6月23日(日) 15:00~18:00

- ・宮脇千絵（南山大学）「趣旨説明と研究会の進行について」
- ・山田仁史（東北大学）「ヴィルヘルム・シュミットの生涯と今日的評価」
- ・角南聡一郎（元興寺文化財研究所）「大林太良の物質文化研究——隣接諸学問の関係再考に向けて」
- ・後藤明（南山大学）「大林太良の考古学・日本古代史研究」

第2回研究会 2019年11月9日(土) 15:00~17:30

- ・渡部森哉（南山大学）「アンデス研究における理論の系譜」
- ・クネヒト・ペトロ（南山大学）「Missionary and

- 第3回研究会 2020年1月26日(日) 15:00~17:30
- ・岡本圭史(中京大学)「異人・都市・国家——ケニアの悪魔崇拝言説について」
 - ・吉田竹也(南山大学)「観光の定義の困難さについて」

2020年度

- 第1回研究会 (Zoom 開催) 2020年10月24日(土)
15:00~17:30
- ・藤川美代子(南山大学)「中国の水上居民はいかにして研究の俎上にのせられたか」
 - ・宮脇千絵(南山大学)「中国民族研究と少数民族の服飾へのまなざしの変遷」

- 第2回研究会 (Zoom 開催) 2021年2月21日(日)
15:00~17:30
- ・高村美也子(南山大学)「スワヒリ (Swahili) 形成過程と現在のスワヒリ」
 - ・菅沼文乃(南山大学)「現在の若狭村御願——「やり方」の継承にみる」

- 第3回研究会 (Zoom 開催) 2021年3月14日(日)
10:00~12:30
- ・野澤暁子(南山大学/名古屋大学/ミシガン大学)「ジャワ遺跡壁画の物語——文献学的解釈と文化実践」
 - ・竹内愛(南山大学)「ネワール社会における女性自助

- 2021年度
- 第1回研究会 (Zoom 開催) 2021年6月27日(日)
15:00~17:30
- ・張玉玲(南山大学)「文化人類学における華僑華人研究の意義と方法」
 - ・藏本龍介(東京大学)「聖典宗教の人類学に向けて」

- 第2回研究会 (Zoom 開催) 2021年10月10日(日)
15:00~17:30
- ・中尾央(南山大学)「理論のトリセツを考える」
 - ・石原美奈子(南山大学)「聖者の人類学」

- 第3回研究会 (Zoom 開催) 2022年2月24日(木)
13:00~15:00
- ・Benjamin Dorman(南山大学)「Stolen Generations: Case studies of indigenous peoples and minorities in Australia」
 - ・Esben Petersen(南山大学)「Stolen Generations: Case studies of indigenous peoples and minorities in Denmark and Greenland」

(付記)

研究協力者(人類学研究所非常勤研究員)として当初よりこの共同研究に関わり、シンポジウム「人類研の歩みと人類学の未来」にもご登壇くださった故・山田仁史氏のご冥福を衷心よりお祈りするとともに、ご尽力に心より感謝申し上げます。